
雨が止んだら一緒に踊ろう

アオキチヒロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨が止んだら一緒に踊ろう

【Zコード】

Z6875E

【作者名】

アオキチヒロ

【あらすじ】

気儘で、自由で、だけどどこか気品を漂わせている。そんな猫みたいなアコミ先輩のことが、僕は大好きだった。

『Dream Like Reality』

え？ それから僕はどうしたかつて？

ええと……ごめんね。僕、その日のことはほとんど覚えてなくてさ。確かに帰ろうとしてたはずなんだけど、いつの間にか病院に居たし……あんまり思い出せないんだ。

そう、ずっとこうなんだ。入院してから、なんだか心がふわふわしていく……一体何処までが夢で、何処から現実なのか、よく分からないんだ。

ああ、でも大丈夫。この前ね、お医者さんが言つてたんだ。すぐによくなるよって……うん、だから心配しなくても大丈夫だよ。学校も、休みっぱなしじゃ駄目だしね。

チャイムの音とか、結構聞こえるんだ。ほら、こいつて、丁度学校の裏手にあるからさ。

ああ、アコミ先輩のこと？ 足を怪我をしちゃって入院してるよ。今はまだ寝てるんじゃないかな……ううん、違う病棟だよ。そう、これからお見舞いに行くんだ。

「こんにちは、先生。今日も酷い雨ですね。……あはは、ホント、
気が滅入っちゃいますね。」

「でも大丈夫ですよ、明日からは晴れの日が続くって、天気予報で
言つてましたから。ええ、桜もそろそろ見納めですね。全部散
っちゃう前に、お花見したいなあ。」

「……僕ですか？ 僕は今からアユミ先輩のお見舞いに……まだ寝
てますか。やつぱり。」

「あ、先生、アユミ先輩の具合はどうですか？ ああ、良かつ
た。もう歩けるんですね。良かった、本当に……え？ そりや
あ心配しますよ、大切な人なんですから。」

「そうだ、先生。」

アユミ先輩、いつになつたら、また喋れるようになりますか？

『Boy Meets Girl』

「氣儘で、自由で、だけどどこか氣品を漂わせているアユミ先輩の
ことを、僕はいつも猫みたいだなと思って見ていた。」

「今時珍しい、長くて綺麗な黒髪が、黒猫を連想させたのかもしれ
ない。」

あるいは、美術室の前にあるベンチでうたた寝をしていた彼女を
見て、塀の上で寝をする猫を思い出したのかも知れない。」

猫は人じやなくて場所に懐くのだと、誰かが言つていたよつた気がする。それはあながち間違いじやないとと思う。

そのベンチは、先輩のお気に入りの場所だった。

昼休みになると、そこでお弁当を食べる。雨の日以外は、大抵座つていた。一人の時もあれば、友達と一緒に時もあった。

そして、そのベンチが見える美術室の隅の席。そこが僕のお気に入りの場所となつた。

最初は、見ているだけで良かつた。

先輩を見かけた日は嬉しくて、見かけない日はなんだか物足りない気持ちになつた。

ずっとあの人のことを見ていたいと思つて、いつしか僕のスケッチブックには、先輩の絵が増えていつた。

きっと喋ることも無いだらう。僕は見ているだけ、あの人は僕のことを知らない。それはきっと、ずっと変わらない。だから、せめて絵くらいは。

そう思つていたから、あの日はとても嬉しかつた。

「ねえ、そのモデルつて、もしかして私？」

先輩に、初めて声を掛けられた日。

窓の向こう側から、食べ終わつた弁当箱を片手に話しかけてきた先輩。

勝手に絵を描いていたことを咎められると思つていたのに、先輩はそんなこと、一言も言わなかつた。それどころか、僕の絵を褒めてくれたのだ。

「きみ、絵、上手だね。他には無いの？」

そう言つて、微笑んでくれた。きっとあの瞬間、僕は先輩に恋をした。

『Six Months Ago.』

可愛くて優しいアユミ先輩は、異性の友達が多い所為か、同性から妬まれることがよくあった。

それは他学年の女子でも同じことのようで、一つ下の僕でさえ、先輩の陰口を耳にすることが多々あった。

どれもありきたりな噂ばかりで、内容はいつも似たような話ばかり。男に色目を使ってるだの、一段を掛けているだの、新米教師をたぶらかしただの。

どうして女子といふ生き物は、そんな下らない話をしたがるんだろ。それが本当だという証拠も無い癖に。

先輩が、そんな根も葉もない噂など気にしてないようになつてながら、本当はとても傷ついていたことを僕は知つてゐる。

「恵多くんはさ、私が一段してるって噂とか、信じてたりする？」
「まさか。信じてる訳ないじゃないですか？」

「本当に？」
「本当にです」
「……ありがと」

少しだけ涙ぐみながら、あの日のように微笑む先輩を見て、僕は一世一代の勇気を振り絞り、ずっと言いたかったことを先輩に伝えた。

「僕、アユミ先輩のことが好きです」

返事はもうえなくてもいい。最悪の返事でもいい。ただ、伝えたかった。

先輩は驚いた顔をして、だけどすぐに笑顔で、真っ赤になつて黙り込んだ僕に返事をした。

「私も、恵多くんのこと、好きだよ」

今なら、死んでもいいや。本気でそう思った。

『Three Months Ago』

「あ、黒猫」

先輩が見つめるその先を、僕も同じようにして見る。

そこには、綺麗な毛並みの黒猫がトコトコと横断歩道を渡つていふところだった。

周りの雑踏など気にもせず、自分のペースで歩く猫を見て、僕は思わず吹き出す。

「どうかした？ いきなり笑っちゃって」

「や、なんだかあの猫、先輩みたいだなあつて思つて」

「えー？ 黒猫が？」

不吉の象徴にされる黒猫に似てると言われて、あからさまに拘ねてみせる先輩を見て、また笑つてしまつ。

「いえ、そうじゃなくて……僕、初めて先輩を見かけ時、猫みたいだなあつて思つたんですよ」

「へー……今は？」
「秘密です」

恋人同士になつても、僕の『先輩呼び』や敬語はそのままで、今までと殆ど変わらない毎日だつた。

変わつたことと言えば、放課後は一緒に帰るよになつたこと、手を繋ぐよになつたこと、お揃いの指輪をするよになつたこと。だけどそれはとても居心地のいい日々で、僕は幸せに満ち足りていた。毎日が楽しくて仕方がなかつた。

一緒に弁当を食べて、放課後は一人で寄り道をして、休みの日には、先輩が見たいといった映画を見る。ずっとこんな日々が続くのだと思つていた。否、続くはずだつた。

僕があの日、あんな所に居なければ。

『One Months Ago』

放課後、いつもの待ち合わせ場所に来ない先輩が心配になつて、迎えに行つた一年生の教室。

先輩は誰か知らない男とキスをしていて、少しだけ開いたドアの隙間から僕はそれを見た。

信じられないその光景に啞然としていると、先輩と男が楽しそうに喋り出す。

「こんなことしてて、彼氏が怒らない?」

「彼氏なんて居ないよー」

「一年の子は?」

「ああ、あの子は友達」

「お揃いの指輪してるのに?」

「これ? 違うよ、これはあっちが勝手に真似してるだけ」

フタマタヲ シテイル。

どうして僕という生き物は、その噂を信じなかつたのだろう。それが嘘だという証拠も無い癖に。

僕はそこから走つて逃げ出して、何処に行けばいいのか分からなくて、でもとにかく走つた。ただひたすらに走つた。

何か叫んでいたかも知れない。泣いたのかも知れない。どうせつて帰つたのかも分からぬけど、いつの間にか家に着いていた。訳も分からず、僕は何か固くて冷たい物をカバンに入れて、携帯を取り出す。

フォルダの一番上に登録してある番号を押して、三回目のコールである人の声。

「もしもし、先輩。いま何処にいますか? ああ、ちょうど良かつた。渡したい物があるんです。学校の裏手にある、桜の木のところまで来てくれませんか?」

声は、いつもどおりだった。頭で考える前に、口がペラペラと言葉を吐きだしていた。

身体は勝手に動いていた。誰かが僕を操つてゐるようだった。自分が今から何をしようとしているか、まるで分からなかつた。

気が付いたときには、辺りはすっかり真っ暗で。僕の足元には、先輩が倒れていた。

あれ？ どうして先輩は倒れてるんだろう。
どうして、こんなに血がたくさん出ているんだろう。ああ、あいつ
とこれ、血なんかじゃないんだ。だつてこんなに血が出ていたら、
痛がるはずだもの。

ねえ、アコミ先輩、起きてください。こんなところで寝てたら風
邪をひいちゃいますよ。

……それにしても、先輩、ずいぶんと小さくなつてしません？ そ
ういえば、足が見当たりませんね。

一体どう忘れてきたんですか？ ああ、こんなところにあつた。

あれ？ 先輩、もしかして、死んでるんですか？
ああ、やつぱり。

だつて、首が……。

ええと……「めんね。僕、その日のことはほとんど覚えていなくてさ。確かに帰ろうとしてたはずなんだけど、いつの間にか病院に居たし……。

一体何処までが夢で、何処から現実なのか、よく分からないんだ。

『"Dreamlike reality" or "Dream like reality"』

あ、アコミ先輩。こんなところに居たんですか。僕はてっきり病室で寝てるものだと……。

いくら歩けるようになつたからって、包帯はまだ取れてないんですからあまり遠くへは行かないようにしてくださいね。

そうだ……ねえ、アコミ先輩。雨が止んだら、桜を見に行きませんか？ 病院の裏手にある、あの桜の木。とっても綺麗なんです。足はまだ痛みますか？ 痛いなら、遠慮せずに言つてくださいね。僕が運んできますから。

……先輩、まだ喋れませんか？

大丈夫、焦らずに、ゆっくり治していきましょう。僕もちゃんと毎日お薬を飲んでるんです。ここの人達はみんな優しいから、きっとすぐによくなりますよ。

だから、ねえ、先輩。喋れるようになつたら、一番に、僕のこと好きだと言ってくださいね。

あの時みたいに。

僕がそう言いつと、アコミ先輩は「みやあ」と尻尾を揺らしながら、可愛らしく鳴いた。

(後書き)

いつだつて僕は、覚めるこのことの無い夢の中で貴女に話しかけている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6875e/>

雨が止んだら一緒に踊ろう

2010年10月15日19時35分発行